発達心理学者の子育て奮戦記（10）

赤ちゃん、お姉ちゃん、そしてお母さん

長田瑞恵

きょうだいげんか

わが家の娘は三歳七か月、息子は一歳二か月を過ぎました。娘は何をするにも弟のことを気に掛け、「小さなお母さん」と言わんばかりにかいがいしく弟の世話を焼きたがります。しかし、時にそれが自己主張のはっきりしてきた息子の意思とは反してしまい、小競り合いになることも増えてきました。

息子はおもちゃの電話が大好きで、それを耳に当ててて、「うう、ううー、うう?」などとまるで誰かと話しているかのような声を出して遊びます。すると娘はちょっかいを出し始めます。娘はほかのおもちゃを持ち出し、「H（弟の名前）君、これ貸してあげるよー」と無理に弟に押しつけます。そして、弟の持っていた電話を取り上げ、「これはお姉ちゃんに貸してね」と、ちゃっかりしたものです。最初のうちは、姉があてがったおもちゃをおとなしく受け取っていた息子も、しだいに「何だかおかしい」

ということに気づくようになってきました。そして、自分が持っていたおもちゃを取り上げられそうになると、きゃーきゃーと大声を出して抵抗するようになりました。

私はしばらく二人の様子を見ています。すると、二人はきーきーわーわーと奇声を発しながら一つのおもちゃを引っ張り合い、しかも二人共が、ちらちらと私の顔色をうかがうのです。

私は、子どもたちがいきなりたたき合いを始めるなど、よほど危険な状態にならない限り、基本的にはきょうだいげんかにはあまり口出ししないことにしています。小さな衝突を経験することが、やがて自分とは違う他者の気持ちや意図を推し量る能力につながっていくと思うからです。その一方で、思いやりのあるかかわり方、不要な衝突を避けるかかわり方の例を周囲の大人が示すことも必要だと考えています。おもちゃの引っ張り合いをしながらこちらの様子をうかがう二人の顔には、自分に加勢を求める気持ちだけでなく、「お母さん、こういう時にはどうしたらいいの?」という問いかけが表れているように思えます。

おもちゃの引っ張り合いから押し合いになり、互いに手が出始めるころ、私は娘と息子の双方に声をかけます。どちらか一方だけを我慢させるのではなく、できるだけ二人共が納得しそうな提案をします。

「S（娘の名前）さん、これはH君が先に遊んでいたおもちゃだからね。H君がいやだよーって言ったら、無理には取らないでね。一緒に遊ぼうよって言ってみたら?」

「H君、お姉ちゃんのことたたかないでね。お姉ちゃんがおもしろいおもちゃ、貸してくれるって。こっちでお姉ちゃんと一緒に遊んでみようか?」

娘も息子も私の声かけに少しほっとしたような様子で、互いの妥協点を探り始めます。たいていは、

娘は息子の持っていたおもちゃがどうしても欲しかったわけではなく、息子のほうも是が非でもそのおもちゃでなければならないというわけではないのです。

「じゃあ、これで一緒にあーそーぼ！」

娘のかけ声で、二人はまた仲良く遊び始めるのでした。

きょうだいとしての娘と息子のやりとりを見ていると、親子のかかわりにはない何かがそこにあるように感じます。娘は息子に対して、自分より小さいものをいたわる優しさをもって接してくれます。一方の息子も、娘のやることには大人のやること以上に注意を向け、経験を共有しようとします。きょうだいの間には大人との関係の中では経験しないような多くの葛藤が生じます。その一方で、わが家の子どもたちを見ていると、年齢も興味関心も近い存在が身近にあることで、互いに愛着を感じながら、支え合う関係を築いていっているようにも思えます。

遊び疲れて眠ってしまった弟を起こさないように注意しながら、そっとタオルケットを掛けている娘の姿を見ていると、二人の子どもに恵まれた幸せに改めて感謝したいと思うのでした。

心の理論

娘はとてもおしゃべりで、大人顔負けのことを言

うこともよくあります。息子が泣いていると、「H君、○○が欲しいんじゃない?」などと弟の気持ちを代弁するようなことを言う時もあります。そのため、娘がまだまだ幼い子どもであるということを私のほうがつい忘れてしまいがちです。娘も大人と同じように他者の気持ちや考えを推し量ることができるだろうと、私は知らず知らずのうちに期待してしまっているようで、それが原因で娘とぶつかることが増えてきました。

たとえば、娘は時どき、私の呼びかけや問いかけに対して返事をしないことがあります。時には反抗期ゆえの意地を張り、わざと返事をしないでいるようです。ただ、毎度毎度反抗して私の声かけを無視しているのかというと、そういうわけでもないらしく、何度か呼びかけると「あれ? お母さんにはわからなかったのかな?」といったような表情で答えを返してきます。しかし、何度も娘が返事をしないことが重なると、私のほうは「私の問いかけを娘がわざと無視している」という解釈をしがちで、つい、「ちゃんとお返事しなさい」と娘に注意してしまいます。

心理学では、自分や他者の「心」の存在を物の世界とは区別して理解できることを「心の理論」と呼び、その発達について膨大な研究が積み重ねられてきました。心の理論研究でよく用いられる課題に、現実とある人の信念が食い違っていること(誤信念)の理解ができるかどうかを問うものがあります。

たとえば、「Aはチョコレートを緑の棚に入れて出て行った。Aが不在の間にBがやってきて、緑の棚から青の棚にチョコレートを移した。Bが出て行き、Aが戻ってきた」というストーリーを聞かせたうえで、「戻ってきたAは、チョコレートがどこにあると思っているか?」と尋ねます。AはBが自分のいない間にチョコレートの場所を移したことを知りま

せんので、正解はAが最初にチョコレートを入れた「緑の棚」となります。しかし、だいたい四歳くらいより前の子どもたちは、実際にチョコレートが入っているほうの「青の棚」と答えます。これは質問されているAの「誤信念」ではなく「真実」を答えてしまっており、心の中で信じていることと現実との区別がうまくいっていないためと考えられます。

三歳六か月のころ、娘にこの課題を行ってみると、娘は「緑の棚（他者の誤信念）」ではなく「青の棚（真実）」と答えました。他者の信じていることや考えていることは、必ずしも事実そのものと一致するわけではないということは、幼い娘にはまだまだ理解が難しいようです。そう考えれば、返事をしない時の娘は、「問いかけを無視している」というわけではなく、「自分にとっては言うまでもなくよくわかっていることでも、声に出して返事をしないと母親には伝わらない」ということがよく理解できていないだけなのかもしれません。

これからも当分の間、返事をしない娘に何回も何回も「お返事してね、そうしないとお母さん、Sが思っていることがわからないから」と語りかける毎日が続いていくことでしょう。いずれ、娘が他者の心の存在を適切に理解するようになる日まで、辛抱強く待ちたいと思います。

未来への展望

最近、娘には少しずつ時間の概念が育ち始めたようです。「S、前はちっちゃかったねー」などと過去の自分について語ることもあれば、「明日、お買い物に行こうね」と近い未来について話すこともあります。

そのような中で、娘の成長を感じたひと言がありました。

「S、そのうち、大きいお姉ちゃんになるの。それ

で、次は、お母さんになるの」。

以前、娘がもっと小さいころに、「赤ちゃんが欲しい」という娘に、私が「Sはそのうち大きいお姉ちゃんになるの。それからお母さんになるのよ。そうしたら赤ちゃんが来るからね」と教えたことがありました。その時は聞いているだけの娘でしたが、最近になって、自発的に「未来の自分」として話すようになったのでした。

赤ちゃんからお姉ちゃん、そしてお母さんへ。

ついこの間生まれたばかりだと思っていた娘も、独立した人格の持ち主として自分の意志で行動するようになりました。時にはその行動が母親である私の予測を超えて、私を戸惑わせることもあるほどです。そして、現在や過去のことだけでなく、未来への展望まで語れるようになったのです。

毎日、就寝前に娘と二人で布団に横になりながら絵本を読み、たあいもないことを話しながら過ごす短い時間があります。二人で同じ布団をかぶりながら手をつなぎ、娘は日中あったことやおもしろかったことなどをぽつりぽつり話します。慌ただしい毎日を送る中で、私たち親子にとってかけがえのない時間です。そして、私にとっては、娘の命の重みや成長の速さを改めて感じる大切なひとときです。

ともすると、私は忙しさを言い訳にして、娘に対して大人の「当たり前」や期待を押しつけがちです。しかし、就寝前に娘が語る言葉を聞いていると、いま、この時の娘が生きる世界に寄り添い、娘の言葉や行動の意味を共有しながら過ごしていきたいと思うのです。

いつか、娘が思い描く未来のように、大人になった娘が自分の子どもと過ごす時、母としての私の思いが娘に伝わってくれればいいと心から願っています。

（十文字学園女子大学准教授）